第一小学校シンボルツリー　学校教育目標「夢を持ち、学び合い・支え合う児童の育成」

くすのき

校訓「かしこく　やさしく　たくましく　そしてふるさとを愛する子どもに」

西合志第一小学校
学校だより 第36号
裏面あり
文責　校長　西村羊治
令和6年9月9日

組織力と心身健康の大切さ！

雨乞い踊りを披露する第一小の子ども

７月２７日（日）、西合志第一小学校３年生以上の参加可能な子供たちが、第１６回合志市人権教育研究大会のオープニングで雨乞い踊りを堂々と発表しました。校長として、みんなの凛々しい姿を見られたのはとても嬉しかったです。

私は次の２８日に右肩腱板断裂回復手術のため入院しました。２９日に手術をし、それから６週間右肩に負担をかけないよう装具を付けることになりました。右腕右手は麻酔のため、自分の意志で動かすことができません。でも栄養を摂らなければならないので、左手で箸を持ち食事を試みます。なんと難しいことか、右手なら難なく食事をしていたのに、箸をうまく持てません、食べ物をつかめません。普通なら１０分もあれば済む食事が、２０分も３０分もかかってしまいます。手術の時に切開した肩の傷も１日ではふさがらないので、風呂はもちろんシャワーも禁止です。１週間は看護師さんに体を拭いてもらいました。１週間も風呂に入らなければ頭髪もべっとりです。背中がかゆくても左手だけでは届きません。孫の手を使っても無理です。靴下を左手だけではくのにも苦労しました。５７年生きてきて今まで４回入院し、自分の体験はもちろん様々な患者さんから話を伺うことで、健康の有り難さを感じます。自分で歩けること、自分で食事ができること、自分でトイレに行けること、自分でお風呂に入り体を洗えること、健康な時には当たり前のことですが、実はそれは当たり前ではなくとても有り難いことであることを、昨年と今年の体験で再確認しました。日頃の平凡な日常が当たり前ではなく有り難いことで、奇跡的なことであること、感謝すべきことを感じざるにはおえません。日々当たり前に過ごせること、子供たちのいる学校現場で働けることの幸せを感じながら、一日一日を大切に過ごしていくべきだと思います。

昨年からの２年連続での長期入院となり皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。西合志第一小学校８９名の子供たちのために微力ながら頑張っていきたいと、さらに気持ちを改めているところです。

このたよりの題名に「組織力」と書きましたが、入院していた医療現場の組織力から感じたことです。病院での手術と聞くと執刀医（ドクター）や看護師はすぐ思い浮かぶと思いますが、その他にもなくてはならない大切な仕事をしている人がたくさんいます。麻酔科のドクター、レントゲン技師（MRI も）、栄養士、調理員、清掃作業員、施設管理員、薬剤師、社会福祉士、事務員、作業療法士、理学療法士、交通整備員、売店の販売員等々、様々な方々が入院患者の命を守るために毎日責任を持って仕事をしておられます。清掃作業員の方がいなかったら、ごみはあふれかえり毎日使わせてもらうトイレを気持ちよく使うことができません。病院に関わるすべての方を書き表すことはできませんが、どれか一つでも欠けたら病院は成り立ちません。すべての人が重要で必要な方です。この様なことを考えてみると入院させていただき健康を取り戻せることは、本当に有り難いことと深く考えることができます。組織力は、学校現場でも大切なことです。校長が学校をつくっているのではありません。教頭、教務、担任、養護教諭、事務、用務、各主任、教育支援員、介護支援員、調理員、理科専科、英語専科、ALT、ICT 支援員、合志市教育委員会、教育事務所、子供はもちろん、保護者、各区長、見守りパトロール、学校評議員、民生委員、合生文化会館等々の地域の方々、すべてあげることはできませんが、多くの人の関り、組織力で成り立っていま

す。戦国武将の毛利元就の「一本の矢は簡単に折れるが三本まとめて束にすれば折れない」という名言があります。まさしく組織力であり、すべての人がそれぞれの専門分野で同じ目標に向かって進んでいくと大きな力となります。昨年は５か月、今年は１か月の入院をさせていただくこととなり、すべての方にご迷惑をおかけいたしましが、校長不在の中、それぞれの方が子供たちを守ってくださいました。皆さんの「組織力」に感謝です。

話は少し変わりますが、私のリハビリは術後早い段階から始まりました。病室からリハビリセンターに行き、作業療法士の方に右肩右腕のリハビリを受けるのです。担当の方は若い女性の方でした。いろいろお話をさせていただくと、その方は合志市出身でした。大学を卒業し大阪で医療に従事していたが、地元熊本に戻ってきたとのことでした。しかも、小学校は西合志中央小、中学校は西合志中を卒業したとのことです。また、作業療法士の資格は私の長女が事務をしている大学で取得したことがわかりました。なんとも不思議な縁を感じました。２８歳となり立派に社会貢献しておられるのです。それが嬉しいことに隣の中央小、西合志中の卒業生なのです。私は第一小勤務ですが、頼もしく誇りに思い、とても嬉しく感じました。

このことから、改めて将来を担う人材を育てている小学校や中学校である学校教育の大切さと重要性と責任の重さとやりがいを感じました。我々大人は昔子供でした。子供たちは将来大人になります。教育基本法第一条教育の目的に「教育は、人格の完成を目指す」とあります。そのために教師は、子供たちに真摯に誠実に向き合い愛情をもって関わっていくことが絶対に必要です。西合志第一小学校の未来ある８９名の子供たち全員に周りにいる大人がよってたかって関り、いけないときは叱り諭し、善い行いをしたときは認めほめ、保護者や地域と手を取り合って一緒に寄り添い励ましながら、子供たちのやる気を引き出していくことができれば最高だと思います。

気は早いですが、今年度も残り７か月となりました。前期後半がスタートして３週目です。まだまだ猛暑が続きますが、８９名の大切な子供たちを学校等の組織力を最大限に発揮し、健全育成に努めていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。どうぞ皆様が心身共に健康でありますように！願っております。(心身共に不健康だった私が言うのもなんですが・・・笑)

「なぜ」と、好奇心を持つこと！

私の指先にはめたパルスオキシメーター

私は職員の提案で、夏休み明け集会に病院からオンラインで参加させていただきました。いつも「命」と「成長」の話をしていますが、成長するために「なぜ」と疑問を持ち「好奇心」をもって過ごして欲しいと話しました。

私は入院中、毎朝看護師さんが体温・血圧・血中酸素濃度を測りに来てくださいました。血中酸素濃度を測る医療機器はパルスオキシメーターと言います。考え出したのは、青柳卓雄というノーベル賞ものの開発をした研究者です。私は、指に挟むだけで短時間に血液中の酸素濃度が、なぜわかるのかがとても不思議でした。ある看護師さんに直接聞いてみましたが、名前や使い方はもちろんご存じでしたが、仕組みについてはご存じありませんでした。私は、ネットですぐ調べてみました。血液には黒っぽい静脈血と酸素を多く含んだ真っ赤な動脈血があります。その割合をパルスオキシメーターが出す赤外線等で指先の血管の中の静脈血と動脈血の割合を瞬時に判断して、血中の酸素濃度がわかるという仕組みでした。わざわざ血液を取り出すことなく、装着時は常に酸素濃度変化がわかることで、今では世界中で使用される人の命を守る重要な医療機器です。

子ども達が、何かを見たとき、何かを聞いたとき、「なぜ」という疑問を持ち「好奇心」を持って、自ら主体的に調べ知ること、わかることの楽しさや成就感を味わっていけるよう、「成長」して欲しいと願っています。皆さんならできます！